

奈良県立万葉文化館蔵

『萬葉集書緝籠』^{かきつめこ} 解題

井上 さやか

【書誌情報】

(貴重書番号：口46)

〔書写年代〕 江戸時代後期

〔体裁〕 美濃判袋綴

〔冊数〕 二十四冊

〔寸法〕 縦二七・三cm 横十九・五cm

〔料紙〕 楮紙

〔著者〕 倉石暉守

〔収録巻〕 『万葉集』巻一、二、十一～十七〔内訳：本書巻一

～三(万葉集巻二)、四～六(同二)、七～九(同十三)、

十～十三(同十一)、十四～十六(同十二)、十七～

十九(同十四)、二十(同十五)、二十一～二十二(同

十六)、二十三～二十四(同十七) 収載〕

〔その他〕 「倉石家蔵書」印あり

【解説】

『萬葉集書緝籠』^{かきつめこ}は、倉石暉守^{みかもり}(倉石啓道・一八〇七年生～一八六五年没)による『万葉集』の注釈書である。未完であり、奥書や識語の類はない。

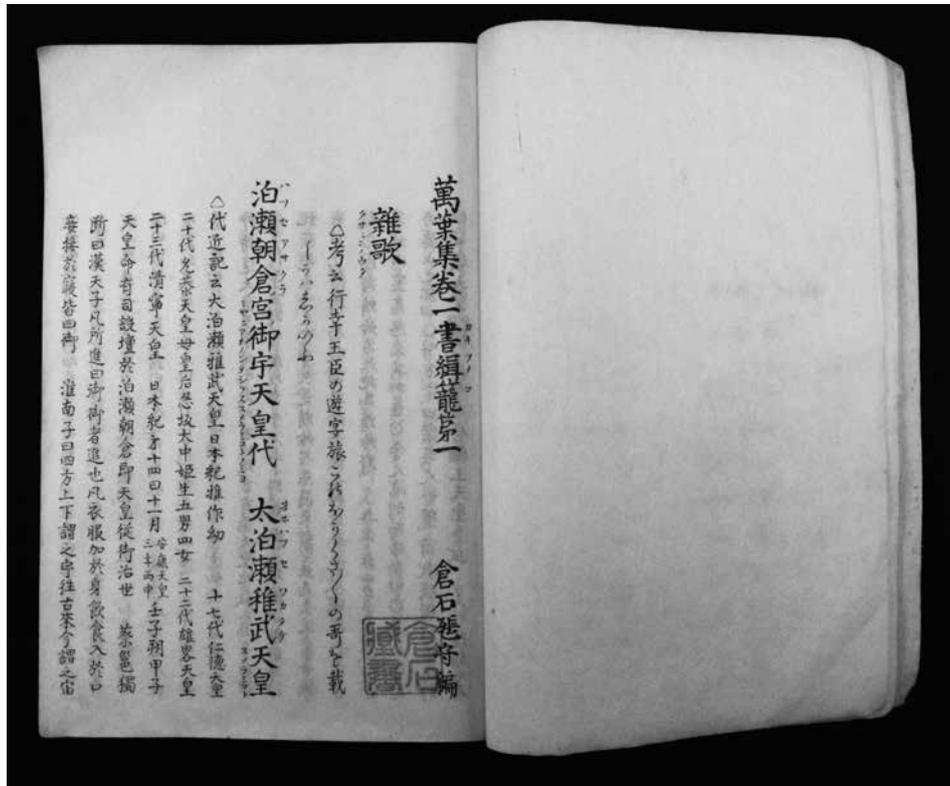
倉石家は新潟県上越市高田区の商家で、実弟に『梁塵秘抄』孤本を所有していた倉石堅助(室直助)、高田藩校修道館の督学となつた倉石成憲(侗窩)、叔父に鈴屋門人の倉石為光(高積)がおり、代々学問芸術に優れた人物を輩出したことでも知られる。

本書は茶を好み歌も詠んだ暉守が隠居後にまとめた書とみられ、書名のとおり先学の注釈を集めたものである。^①本文は宝永版本後刷に拠り、本文左側に加藤千蔭『万葉集略解』の訓を付し、契沖『万葉代匠記』、賀茂真淵『万葉考』、『万葉考別記』、本居宣長『万葉集玉廼小琴』、『玉勝間』、荒木田久老『槻乃落葉信濃漫録』、加藤千蔭『万葉集略解』、本居宣長・田中道磨『万葉問聞抄』、藤原彦磨『万葉爪印』からの引用で構成されている。引用書の選択は、本居宣長に私淑していたことに拠るか^②と指摘されている。

註

① 伊丹末雄「万葉集書緝籠」『上代文学』第三号、一九五三年十一月
『万葉集難訓考』(一九七〇年七月)所収)

② 石川満雄「倉石暉守と『万葉集書緝籠』」『国語研究』第一一集、新潟県高等学校教育研究会、一九六四年三月



倉石遜守著『萬葉集書緝籠』
奈良県立万葉文化館所蔵